

外部評価書

静岡大学
国際交流センター

平成 21 年 1 月

目次

外部評価委員名簿	1
静岡大学国際交流センター外部評価について	2
外部評価委員からのコメント	6
外部評価委員の調査票	10
外部評価委員会日程・会議次第	21

外部評価委員名簿

(委員長)

門 倉 正 美 氏

横浜国立大学留学生センター教授

(委員)

岩 崎 正 美 氏

鳥取大学理事・副学長（研究・国際交流担当）

山 口 し の ぶ 氏

東京工業大学学術国際情報センター教授

静岡大学国際交流センター外部評価について

国際交流センター長

露 無 慎 二

1 はじめに

静岡大学国際交流センターは平成18年4月1日に、それまでの留学生センターを発展的に改組拡充し、教育・研究両面での国際交流活動を一体的に推進するために設置された。それ以来、未だ3年を経えていないが、当初准教授1名で発足した学術交流部門も平成20年4月には准教授1名を学生交流部門から移し、さらに同8月には教授1名を加え、徐々に静岡大学の国際戦略を強力に推進していく体制を整備してきた。

このたび、全学的評価活動の取組の一環として、国際交流センターの自己評価及び外部評価を行った。今回、外部評価委員からよせられた貴重な提言・助言を今後の業務遂行に生かすとともに、国際交流センターの設置目的を達成するために、更に積極的に諸活動を展開して、静岡大学のグローバル化を強力に推進していきたい。

2 外部評価会議について

国際交流センター外部評価会議は平成20年12月19日に実施した。3名の外部評価各委員には、11月中旬に「自己評価書」をお送りし、事前に目をとおしていただいた。

評価会議当日は、委員の間で互選により、委員長を横浜国立大学留学生センター教授門倉正美氏にお決めいただき、委員長の進行の下に会議がすすめられた。まず、「自己評価書」に沿って7つの基準ごとに「優れた点」及び「改善を要する点」について、国際交流センター側からその根拠を説明するとともに、質疑応答の時間を設けた。その後、3名の外部評価委員による評価会議を開催していただき、「自己評価書」ならびに当日の聞き取り調査に基づいて、委員側から当面のまとめ「外部評価委員からのコメント（議論のためのドラフトペーパー）」を作成し、それに沿って講評をいただいた。その後、若干の質疑応答があった。

評価会議終了後、平成21年1月19日を期限として7つの基準ごとの「評価」及び「コメント」並びに「総合評価」を記載した「外部評価調査票」を提出していただき、これら資料に基づく「外部評価書」を作成した。

3 外部評価委員からの評価について

3人の評価委員からは7つの基準それぞれについて概ね「良好である」または「改善す

べきである」の2つの評価をいただいた。(一つだけ「優れている」の評価をいただいた。)

総じて「改善すべきである」についても、センターの活動が不十分という意味でなく、比較的少ない人数で行われている現在の活動ぶりを評価した上で、それをさらに人員・施設・財務面で下支えしていく必要があるという意味合いで「改善すべきである」の評点が付いたとされている。

優れている面で特筆すべきは、派遣プログラム(朝鮮大学校への韓国語プログラムなど)を息長く着実に実施している点や、県内の留学生・日本人学生と企業人との留学生の日本企業への就職をテーマに行ったアンケート調査を基にした、議論の場「わっ、わっ、わっ」の実施や、異文化社会における日本語教育の実情と問題点に関する公開シンポジウム開催等、地域と係わった事業があげられる。

改善すべきとされたのは、第一に本センターの予算と施設の不足、第二に静岡キャンパスと浜松キャンパスでの人員配置のアンバランス、第三に(主として学术交流部門における)センターとしての国際戦略形成機能や、それを学内のコンセンサスに高めるメカニズムの脆弱性、などが指摘された(詳細は事項参照)。

4 外部評価委員からの提言を受けて

外部評価委員からの提言の詳細及び当面の改善計画は、以下のようになる。

(提言・指摘事項1)

国際交流の戦略構築がセンターの目的にはっきり位置づけられていない。

(改善計画)

センター規則のセンター学术交流部門の業務として「国際化推進の基本計画の策定に関すること。」が規定されている。今後、この(留学生政策を含めた)基本計画について学术交流部門を中心に(年度内を目途に)戦略的なものとして提案し、管理委員会等を通じて全学的合意を図っていく。

(提言・指摘事項2)

学术交流部門が平成20年8月から3名体制になったにも拘わらず十分有効に機能していない。職務分担を明らかにし、「ビジョンと戦略」をさらにすすめた戦略を提案すべき。

(改善計画)

3名体制になってまだ間がないため具体的実績が少ないのが実情。今後各教員の役割分担(当面相手国の地域をもとにした分担)を明確にしつつ、学生交流部門との有機的・機動的な連携にも配慮しつつ国際交流の戦略的推進を進めていく。「戦略」については上記のように国際化推進基本計画について(年度内を目途に)提案し、管理委員会等を通じて全学的合意を図っていく。

(提言・指摘事項 3)

浜松キャンパスにおける国際交流関係の人員を補充すべき

(改善計画)

現在 1 名しかいない浜松キャンパスにおける教員を配置換え定員増を図り、浜松の人員強化を行う。

(提言・指摘事項 4)

現行プロジェクトチーム(外国人教員により構成)が22年3月に解消するのは問題。新たな機能・組織として継続すべき(公募が望ましい)。

(改善計画)

新たな組織としてネイティブ教員の人員を確保するべく、彼らのこれまでの語学教育、センター業務の実績の資料を提示し、大学全体の問題としてとらえた対策を検討していただくべく準備を行っている。

(組織の業務としては翻訳・通訳、異文化理解教育、外国語資料の作成、ホームページの作成、オンライン教材の作成、留学生に対する相談、留学生によるボランティア活動の取りまとめ、地域との連携、イベントの企画・実施など。)

(提言・指摘事項 5)

施設・設備の改善が必要。

(改善計画)

教室、会議室及び学生交流室(談話室)の整備を行う。

(提言・指摘事項 6)

ホームページの改善が必要。

(改善計画)

ホームページの英文の内容や動画表示等の小規模の改善は現在進行中(年度内完了予定)。ホームページの構造の見直しや中国語、ハングル版については予算が必要なため、予算獲得に向けて努力。

(提言・指摘事項 7)

留学生センターから改組した時点で予算が増加していないのは問題。必要な増額を要求すべき。

(改善計画)

必要な予算を積算し要求。

(提言・指摘事項 8)

管理委員会と運営委員会の役割を明確にし、副センター長もそれらの運営に積極的に関わる体制が望ましい。

(改善計画)

各委員会の役割はセンター規則により明確に規定されている。委員の人選等を改選時に適切に行い、実質的・戦略的議論ができるよう運用の改善を図る。

謝辞

最後に今回外部評価委員をお願いした 3 氏の方々には、ご多用な中、外部評価委員をお引き受けくださり、数々の貴重な助言、提言、ご示唆をいただいた。ここに厚く御礼を申し上げます。

外部評価委員からのコメント
(議論のためのドラフトペーパー)

2008年12月19日
横浜国立大学 門倉正美
鳥取大学 岩崎正美
東京工業大学 山口しのぶ

優れた点

- **費用対効果**：他大学に比べ、少人数で多種多様な活動をこなしている。国際交流センターが組織全体として、大学の国際化に貢献しようとするモチベーションの強さが感じられる。また、教職員の連携が良いように見受けられる。
- **地域との連携**：地域日本語教育に関する公開シンポジウム、外部資金を獲得して行われた留学生、日本人学生、現地企業人のグループ討論、懇談会（「話っ、輪っ、和っ」）、など、地域に密着した活動を組織して積極的に情報発信を行なっている。地域コミュニティの国際化の原動力としての存在感が感じられる。
- **国際化プログラムの多様性**：米国ネブラスカ大学、カナダアルバータ大学や朝鮮大学校へのサマープログラム派遣、中東欧との連携（InterAcademia）など多様な国際連携プログラムに取り組んでいる。特に、朝鮮大学校への派遣を着実に継続している点は、学生の目を東アジアに向けさせている点で高く評価できる。こうした、すぐれた派遣実績は、学生に対する派遣アンケート実施やホームページにおける海外留学案内の充実ぶり（特に、『Study Abroad 2008』）によっても裏付けられているように思われる。また、多種多様な業務に加え、朝鮮大学校学生の受け入れサマープログラムを計画・実施する組織力はすばらしい。
- **先進的取り組み**：ダブルディグリー、インターネット講義、秋季入学（インドネシア、ベトナム、タイ）などニーズに基づいた先進的な取り組みを進めているところが大変特徴的である。とりわけ、2009年度からの学部生秋季入学の本格的実施からは、国際交流センターおよび工学部教員の国際交流への熱意がうかがえる。
- **教職員研修**：センター教員の長期海外研修、センター職員の短期海外研修プログラムなど、Staff & Faculty Development に関して積極性が見受けられる。

今後の発展のための分析・Suggestions

1. 「国際交流センター」としての位置づけ・ミッションの明確化

- 静岡大学国際交流センターがなぜ国際化を促進しているかの説明を **positive** な文脈のなかで謳う必要がある。静岡大学のビジョンと使命に積極的に連動させて国際交流センターの概要および使命を記述すべきである。
- 当センターの管理委員会の構成員の見直しの必要がある。国際戦略を審議する場である管理委員会のメンバーは、国際的なビジョンをもち、自ら国際交流事業に関わることのできる人材によって構成されるべきである。また、運営委員会の役割を明確化し、管理委員会との関係も見直すべきである。
- 国際戦略策定、実施、モニタリングに関して、国際交流センターがどの様に関わっていくのかを計画案（アクションプラン）を持って明確にする必要がある。
- 本国際交流センターは研究センターなのか、業務センターなのか、または両方を兼ね備えたセンターなのかを明確化し、学内に周知することが急務である。
- 大学の国際交流の窓口として認知されていない現状を分析する必要がある。留学生センターからの脱皮の必要があると感じられる。「留学生センター」ではなく、「国際交流センター」としての業務内容の見直し、およびミッションの再設定を行なう必要がある。

2. 大学の国際戦略に関わる姿勢、位置づけの明確化

- 大学におけるセンターの位置づけの明確化が必要。「トップからの指示のもとに戦略策定のミッションを持つ」との説明があった（『自己評価書』pp.5-6）が、「センターの目的」としては明文化されておらず、『自己評価書』6ページにもあるように、本ミッションが学内で共有されているとは言いがたい。
- 国際交流センターの概要には、「国際交流事業を推進し、国際化に寄与することを目的としている」とあるが、戦略策定・実施に関してどの様に関わっていくのかの明記がない。
- 静岡大学の利点を生かした国際戦略、国際交流推進策策定をどの様に実施していくのかを考える必要がある。
- 静岡大学の研究・教育の強み（ナノテクノロジーとバイオテクノロジーの強化）と国際交流事業との連携を積極的に推進していくのかどうかの方向性を見極める必要がある。これらの重点領域における国際学術交流に積極的な教員との連携に向けての調査を行ってはどうか。
- 国際戦略に積極的に関わるチームを構築する必要がある。現行のプロジェクトチームに替えて、実質的に国際戦略を担うプロジェクトチームへの脱皮が期待される。セ

ンター長は積極的にプロジェクトチームのポストを活用した国際戦略プロジェクトチームの存在の必要性を説き、その可能性を折衝する必要がある。

- 業務内容と人員のバランスを再考する必要あり。すべてを少人数でこなすのは大変であり、業務内容の優先順位付けの必要があるのではないか。

3. ニーズ調査と国際戦略について

- ニーズ調査の目的を明確にし、またニーズ調査で得られた情報・傾向をどのように戦略に取り入れていくのかを考察する。
- たしかにニーズ調査は必要であり、かなりの労力をかけたニーズ調査を実施したこと自体は評価できるが、学生のニーズに基づいてのみ活動を推進してよいのか？例えば、中国の存在感は益々大きくなり、他のアジア諸国の重要性も増す可能性がある。新しい取り組み、戦略を学生に周知し、推進していく必要があると考えられる。
- ニーズと大学の方向性をバランスする必要がある。どの様な学生を国際的センスを持った学生として輩出したいのか？静岡大学の特性を生かした学生交流のあり方を確立する必要がある。
- ニーズ調査のアップデートの必要性。国際交流のあり方は、学生のモビリティの拡大などにより年々変化している傾向にある。静岡大学のニーズおよび相手校のニーズをアップデートし、国際交流戦略を積極的に推進していくべきである。

4. 浜松キャンパスについて

- 浜松キャンパスのサービスの充実の必要性は非常に高い。現在は、1名の国際交流センター専任教員と2名の工学部留学生受入専門教育教員の緊密な連携とハードワークによってなんとか稼働しているように見受けられる。しかし、留学生数から見ると、本来なら静岡キャンパスと同格のセンターがあつてしかるべきではないか？特に工学分野での留学生が多く、また、工学分野が重点領域となっている現状をチャンスとして浜松キャンパスの国際交流人員の拡充を折衝するべきであろう。とりわけ、国際交流の事務組織がないことは、大きな問題であると考えられる。
- 長期的には、浜松キャンパス国際交流センター（または分室）を設置する方向性が必須である。

5. 情報発信について

- センターの目的と業務内容の表し方を見直し、内外に積極的に広報していく必要あり。
- また、情報発信に関しては、誰に向かつての情報発信なのかを明確にする。例えば、Web ページに掲載された「目的」の表現は明確だろうか？ユーザーの立場に立って (i.e. 留学生) 情報発信されているか？技術的な面からだけでなく、ユーザーにとっても親切的なHP とは何かを留学生・日本人学生・教員と共に考える必要がある。ニーズの

把握の必要性があるように思われる？どの様な情報が必要とされているのか？学生にとって使い易い情報とは？といった点に重点をおいて、情報発信のあり方を再考してほしい。

6. 設備・財務・人事異動・リスクマネジメント

- 設備の拡大の必要性：センターの使命および活動に基づいて要求する必要がある。大学の国際への窓口としてのゲスト対応の必要性および、学生が集まれるスペースが必須である。
- 財務の見直しの必要性：留学生センター時代の財務基盤をそのまま受け継いだ経緯がある。留学生センターの業務を従来通り行うのに加えて、国際交流的事業を新たに担当している現状をアピールして、予算請求を積極的に行なっていく必要がある。効果的な情報発信・交渉を行ない、現状の活動にみあった予算配分を要求すべき。
- 人材移動の問題：事務職員が国際系でトレーニングされた人員が2～3年の周期で移動してしまうのは問題。専門員ポストの可能性については、今後も積極的に検討していく必要がある。
- 職員の派遣制度の強化：毎年3名を派遣し、オリエンテーションも充実している様子がうかがえた。今後益々強化していく必要がある。
- リスクマネジメントについて：学生交流、国際交流事業が増加するにしたがってリスクも高くなるため、現在準備中の「海外の危機管理マニュアル」等のリスクマネジメントに関しては、積極的に取り組む必要がある。

7. その他のコメント

- 情報収集について：情報収集活動が多く見られるが、収集した情報をどの様に国際戦略、国際活動に活用しているのかが明確でない。何を目的とした情報収集なのか、どのような成果があったかを明確に示す必要がある。
- 国際窓口について：国際交流センターが国際戦略の使命を負いながら、なぜ国際交流の窓口として十分に認知されていないのかの現状分析を行う必要がある。
- 教職員のハードワークについて：現状では、教員・職員がハードワークのため疲弊する可能性が大である。職務・業務の位置付けと優先度を明確にしていく必要がある。
- 派遣の学生数について：協定校の増加は派遣学生の増加に直接は繋がらない場合が多い。学生を魅了するような多様性のあるプログラムを提供する必要がある。
- 相談業務について：留学生の相談・指導業務にあたる専任教員が不在である点については、なんらかの改善策が必要ではないか。

静岡大学国際交流センター 外部評価 調査票

評価委員 門倉正美 (横浜国立大学)

基準1 活動の目的 (5~6ページ)

【コメント】

○国際交流の「戦略構築」がセンターの目的の中にはっきりと位置づけられていない。また、全学的に見ても戦略構築とその実施・モニタリングのための組織体制がとられていないように見受けられる。

○学内外への広報という点で、ホームページは大変重要だが、現行のサイトのレイアウトは内容が読み取りにくく、アクセスしにくい。特に在籍留学生を含めた外国人に向けての発信という点では、根本的に再考が必要と思われる。

基準1の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準2 活動の実施体制 (6~10ページ)

【コメント】

○学生交流部門から学術交流部門にまわった定員1名は有効に活用されていると言えるだろうか。この夏から更に教授1名が加わり、学術交流部門の教員定員3名は他大に例を見ない手厚い配置となっているが、3名体制が十分有効に機能しているようには思えなかった。

○学生交流部門の多種多様な職務内容からすると、現在のスタッフは十二分にその職責を果たしているように見受けられたが、より多くの人員が必要である。特に浜松キャンパスの補充と相談・指導担当の専任の補充が急務のように思える。

○現行の「プロジェクトチーム」は何をプロジェクトとしているのかが不明。来年度末の人員交替を機に「国際交流プロジェクト」を発足させるべきであろう。

基準2の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準3 教員の採用・昇格等 (10~11ページ)

【コメント】

○「教員選考に関する申合せ」によって、かなり明確に基準が設定されている。「教育実績・各種活動等」の評価は

基準3の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

「採用」時だけでなく、「昇任」時も考慮されるべきだろう。

○各教員が、毎年度末にその年度の教育・研究・活動実績を一定のフォームで提出する等の実績申告という方法も、教員評価「指標」のひとつのあり方として考えられるのではないか。

基準4 活動の状況と成果

(学術交流部門)(11~13、17~19、21ページ)

【コメント】

○複数体制になって、また当初年度ではあるが、8つの職務をどのように分担・連携してすすめていくのかを考慮すべき時にきているのではないか。

○20ページ記載の「より高い目標設定」では、抽象的すぎるように思う。

○静岡大学の研究・教育・ロケーション等の強み(売り)の部分、全学的合意のもとに把握した上で、それらの領域との実効的な連携体制をつくっていく必要がある。

○「ビジョンと戦略」の策定だけで一段落してしまうのではなく、その戦略のもとでの実施体制と実施状況のモニタリングの体制をつくるようトップに働きかけていく姿勢が必要。

基準4-1-1-1の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準4 活動の状況と成果

(学生交流部門)(14~22ページ)

【コメント】

○4名という少人数でありながら、実に多種多様な活動を行ってきており、またその活動成果も報告書として蓄積させてきている点は、高く評価できる。特に浜松の教員の活動力はすばらしい。

○日常業務のほか、サマースクールの実施、県内留学生の討論会、留学生支援ボランティアの指導、公開シンポジウムなど多くの労力を要する活動を遂行している点も評価に値する。

○現スタッフがオーバーワークにならないため、また活動の質を落とさず、より充実させていくために、派遣業務を学術交流部門に移行させること。また留学生の相談・指導業務のための専任教員の充当を要求することを考慮してほしい。

基準4-1-1-2の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準5 施設・設備（22～24ページ）

【コメント】

○静岡キャンパスで留学生センター時代の5教室体制が、国際交流センターになってからは2教室体制になってしまったという教室環境の大幅な劣化は、何らかの形での改善が望まれる。

○留学生の居場所、留学生と日本人学生が日常的に気軽に交流できる場を工夫して作り出していきたい。

○ホームページについては、基準1のコメントで述べたように、日本語版についても、より見やすく、アクセスしやすい改善を期待したい。また、英語版だけでなく、中国語版、韓国語版も必要でないか。

基準5の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準6 財務（24～26ページ）

【コメント】

○運営費が国際交流センターへの改組後も、留学生センターの時と同じというのは、業務内容の増加を考慮すると、理解しにくい。学术交流部門の必要経費を実績とともに算出して、トップに運営費の増額を要求するべきである。

基準6の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準7 管理運営（26～29ページ）

【コメント】

○自己点検評価および外部評価は、今回が初めてのことだが、学生交流報告書・アンケート調査報告書・「話っ、輪っ、和っ」報告書等、活動実績の報告書は着実に蓄積されてきているように思える。

○「国際交流の実績データベースの構築」は、有意義なアイデアだと思う。数量はデータだけでなく、交流のキーパーソンや交流に至った経緯など、今後の交流に役立つ情報も盛り込むほうがよいと思う。

基準7の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

総合評価（「自己評価書」全体を通してのコメントをお願いします）

- 全体的には「改善すべき点がある」が多い評価となったが、それは現在のセンターの活動が不十分という意味でなく、現在の活動の充実ぶりを評価した上で、それをさらに人員・施設・財務面で下支えしていく必要があるという意味合いが強い。ただ、国際戦略の企画・立案という中核的任務のひとつが学内においても十分に認知されていないという点については、早急に打開策を講ずべきであろう。
- 派遣プログラムを息長く着実に実施している点、とりわけ朝鮮大学校での韓国語プログラムの派遣に取り組んでいる点、朝鮮大学校からの学生のサマープログラムを実施している点は、高く評価したい。
- 地域との交流という点でも、留学生交流推進協議会の主管校として、外部資金を獲得して、県内の留学生・日本人学生・企業人の議論の場（「話っ、輪っ、和っ」）を主催した点と、現在の日本語教育の喫緊の課題である「地域に求められる日本語教育」をテーマとした公開シンポジウムを開催した点は特筆に値する。
- 全般的に少ない人数で国際交流や留学生教育に関わる、実に多種多様な業務を丹念に遂行されていることが実感された。

静岡大学国際交流センター 外部評価 調査票

評価委員 岩崎正美

基準1 活動の目的 (5～6ページ)

【コメント】

- ホームページの一層の充実が望まれる。
- 未来を開く静岡大学～ビジョンと戦略～の目標に国際交流センターが具体的にどうかかわるかの検討が必要。

基準1の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準2 活動の実施体制 (6～10ページ)

【コメント】

- プロジェクトチームに変わる、センターの目的を具体化する新たな任務を持つチームの設置が望ましい。
- 2つのキャンパスの不均衡をなくすため浜松にセンターの新設、もしくはスタッフの配置を含む充実。
- ニーズ、アンケート調査、意向調査等学内向けの優れた取組を評価し、海外への派遣に熱意を感じる。

基準2の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準3 教員の採用・昇格等 (10～11ページ)

【コメント】

- プロジェクトチームにかわる企画力、語学力、交渉力等を有する人材確保を学内よりも広く外部公募（企業等を含む）による道を開くことが望ましい。

基準3の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準4 活動の状況と成果

(学術交流部門)(11~13、17~19、21ページ)

【コメント】

- 部局間交流は、教職員の交流および学術情報の交換が多いが、学生の交流が伴う可能性が高いと思われることから、大学間交流協定を目指す方向で進めては。

基準4-1-1-1の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準4 活動の状況と成果

(学生交流部門)(14~22ページ)

【コメント】

- 学生の海外派遣への留学フェア、スタディアブロード、HPなど各種支援策が充実している。
- 学生交流を入れた全学レベルの協定の方向を目指すのが望ましい。
- 外国人留学生に対する日本語教育プログラムの充実、特に講義、理解のための聴解教材CD、リーディングチュー太など留学生への配慮が見られる。(CDの内容は、学部留学生に少し難しい印象を持った)

基準4-1-1-2の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準5 施設・設備(22~24ページ)

【コメント】

- 狭隘かつ建物の老朽化は否めない。その中であって、日本語教室の確保が2室なされているが、今後、一層の留学生確保と国際化を目指すためにも施設設備の一層の充実が望まれる。

基準5の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準6 財務(24~26ページ)

【コメント】

- センターとして、戦略に沿った予算要求を行うシステムを。
- 戦略を議論する少人数のチームを設置できれば。

基準6の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準7 管理運営（26～29ページ）

【コメント】

○管理委員会と運営委員会の役割をそれぞれ明確にして、委員長は重複せずに、前者をセンター長に、後者を副センター長にして、役割分担を明確にすることも考えられます。

○管理委員会と運営委員会の構成メンバーについて

- ・副センター長を複数（浜松センター長を加える）にして、管理委員会の委員長はセンター長に、運営委員会のセンター長には、副センター長が委員長になることも考えられます。

基準7の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

総合評価（「自己評価書」全体を通してのコメントをお願いします）

- 静岡大学の国際化にける意欲と今回の外部評価のための自己評価書を作成し、評価を受ける姿勢に敬意を表します。
- 2つのキャンパスで平等に国際交流事業が滞りなく推進するために、浜松キャンパスのセンターかと専門職員の充実が望まれます。
- ビジョンと戦略の具現化や文科省の留学生30万人計画への静岡大学の方向性を検討するためのワーキングを立ち上げるなど、企画部門の充実を図っていければと考えます。

静岡大学国際交流センター 外部評価 調査票

評価委員 山口しのぶ

基準1 活動の目的 (5～6ページ)

【コメント】

- 他大学に比べ、少人数で多様な活動をこなしている。また、地域に密着した活動を組織して情報発信を行っている。サマーセッション、米国や、朝鮮大学校への学生の派遣など多様なプログラムに取り組んでいる姿勢、組織力は評価できる。

基準1の評価

- 優れている
 良好である
 改善すべき点がある
 不十分である

基準2 活動の実施体制 (6～10ページ)

【コメント】

- 静岡大学国際交流センターがなぜ国際化を促進しているかの説明を positive な文脈のなかで謳う必要がある。静岡大学のビジョンと使命に積極的に連動させて国際交流センターの概要および使命を記述すべきである。
- 国際戦略策定、実施、モニタリングに関して、国際交流センターがどの様に関わっているのかを計画案（アクションプラン）を持って明確にする必要あり。
- 本国際交流センターは研究センターなのか、業務センターなのか、または両方を兼ね備えたセンターなのかを明確化し、学内に周知する必要が急務である。
- 大学の国際交流の窓口として認知されていない現状分析する必要がある。留学生センターからの脱皮の必要性があると感じられる。「留学生センター」ではなく、「国際交流センター」としての業務内容の見直し、およびミッションの再設定を行なう必要あり。

基準2の評価

- 優れている
 良好である
 改善すべき点がある
 不十分である

基準3 教員の採用・昇格等 (10～11ページ)

【コメント】

- 人材移動の問題：国際系でトレーニングされた人員が2～3年の周期で移動してしまうのは問題。専門員ポストの可能性については、今後も積極的に検討していく事が必要である。
- 職員の派遣制度の強化：毎年3名の派遣し、オリエンテーションも充実している様子。

基準3の評価

- 優れている
 良好である
 改善すべき点がある
 不十分である

今後益々強化していく必要がある。

- 国際戦略に積極的に関わるチームを構築する必要がある。(現プロジェクトチームに替わる実質的に国際戦略チームへの脱皮が期待される。) センター長は積極的にプロジェクトチームのポストを活用した国際戦略プロジェクトチームの存在の必要性を説き、その可能性を折衝する必要がある。
- 業務内容と人員のバランスを再考する必要あり。すべてを少人数でこなすのは大変(業務内容の優先順位付けの必要性)

基準4 活動の状況と成果

(学術交流部門)(11~13、17~19、21ページ)

【コメント】

- 新設された部門として、新事業開拓、外部資金導入など積極的な活動が評価される。
- 国際交流に関わる情報収集に関しては、目的を明確にした上で計画・実施するとより効果的。
- 少ない人数で幅広い活動を網羅している点については大変評価できる。HPの作成にユーザーの視点を更に取り入れるとベター。

基準4-1-1-1の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準4 活動の状況と成果

(学生交流部門)(14~22ページ)

【コメント】

- 積極的に学生の留学ニーズを把握するなどの活動は大変評価できる。同時に、ニーズ調査の目的を明確にし、またニーズ調査で得られた情報・傾向をどのように戦略に取り入れていくのかを考察する必要あり。
- ニーズと大学の方向性をバランスする必要がある。どのような学生を国際的センスを持った学生として輩出したいのか? 静岡大学の特性を生かした学生交流の確立の必要性。
- ニーズ調査のアップデートの必要性。国際交流のあり方は、学生のモビリティの拡大などにより年々変化している傾向にある。静岡大学のニーズおよび相手校のニーズをアップデートし、国際交流戦略を積極的に推進していくことを勧める。

基準4-1-1-2の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準5 施設・設備(22~24ページ)

【コメント】

- 設備の拡大の必要性: センターの使命および活動に基づい

基準5の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

て要求する必要がある。大学の国際への窓口としてのゲスト対応の必要性および、学生が集まれるスペースが必須である。

基準6 財務（24～26ページ）

【コメント】

○財務の見直しの必要性：留学生センター時代の財務基盤をそのまま受け継いだ経緯がある。センターの業務および、国際的事業の増加に伴い、予算請求を積極的に行なっていく必要がある。効果的な情報発信・交渉を行ない、現状の活動にあった予算配分を要求すべき。

基準6の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

基準7 管理運営（26～29ページ）

【コメント】

○当センターの管理委員会の構成員の見直しの必要性。国際戦略を審議する場である管理委員会のメンバーは、国際的なビジョンをもち、自ら国際交流事業に関わることでできる人材から構成されるべきである。また、運営委員会の役割を明確化し、管理委員会との関係も見直すべきである。

基準7の評価

- 優れている
- 良好である
- 改善すべき点がある
- 不十分である

=====

総合評価（「自己評価書」全体を通してのコメントをお願いします）

評価できる点：

- 費用対効果：他大学に比べ、少人数で多様な活動をこなしている。国際交流センターの大学の国際化へのモチベーションが感じられる。また、教職員の連携が良いように見受けられる。
- 地域との連携：外部シンポジウム、現地企業対象のニーズアセスメントなど、地域に密着した活動を組織して積極的に情報発信を行なっている。地域コミュニティの国際化の原動力としての存在感が感じられる。
- 国際化プログラムの多様性：米国ネブラスカ大学や朝鮮大学校への派遣、中東欧との連携など多様な国際連携プログラムに取り組んでいる。多種多様な業務に加え、サマープログラムを計画・実施する組織力はすばらしい。
- 先進的取り組み：ダブルディグリー、インターネット講義、秋季入学（インドネシア、ベトナム、タイ）などニーズに基づいた先進的な取り組みを進めているところが大変特徴的。

○教職員研修：センター教員の長期海外研修、センター職員の短期海外研修プログラムなど、Staff & Faculty Development に関して積極性が見受けられる。

その他のコメント：

- 情報収集について：情報収集活動が多く見られるが、収集した情報をどの様に国際戦略、国際活動に活用しているのか？何を目的として情報収集なのかを明確にする必要がある。
- 国際窓口について：センターが国際戦略の使命を負いながら、なぜ国際の窓口となりきれないのかの現状分析を行う必要性あり。
- 現状では、教員・職員が疲弊する可能性が大。位置付けについて明確にしていく必要がある。
- 派遣の学生数について：協定校の増加は派遣学生の増加に直接は繋がらない場合が多い。学生を魅了するような多様性のあるプログラムを提供する必要がある。
- 相談業務について：留学生の相談業務・指導の専任教員が不在であることが、効果的、効率的な運営に支障をきたす可能性あり。

静岡大学国際交流センター外部評価会議

日 時：平成20年12月19日（金）10：00～15：00

場 所：静岡大学共通教育 A 棟303室

会議次第

- 10：00 開会あいさつ（露無国際交流センター長）
- 10：05 出席者の紹介及び外部評価委員会委員長の選出
- 10：10 自己評価書説明（露無国際交流センター長）
Ⅰ 現況及び特徴
Ⅱ 目的
Ⅲ 基準1～基準3
質疑応答
- 11：00 自己評価書説明（松田学術交流部門長・原澤学生交流部門長）
Ⅲ 基準4
質疑応答
- 11：40 自己評価書説明（露無国際交流センター長）
Ⅲ 基準5～基準7
質疑応答
- 12：00 昼食
- 13：00 施設見学
- 13：30 外部評価委員による評価会議
- 14：00 外部評価委員会からの講評
- 14：50 閉会・御礼（露無国際交流センター長）
- 15：00 終了